

事業名	平成18・19年度広島県キャリア教育実践モデル開発事業
学校名	由原市立西城小学校
所在地	由原市西城281-1
HP	http://www.syobara-sai-jo-e.hiroshima-c.ed.jp/
学校規模	学級数 7 児童生徒数 113名

1 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

①研究テーマ

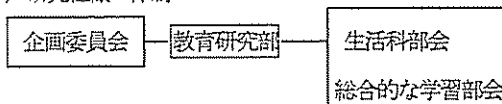
地域の「ひと」「もの」「こと」に主体的にかかわる児童の育成

②研究のねらい

昨年度、本校は図画工作科の授業研究を中心に取り組んできた。その結果、児童は豊かに発想し、広げ、自分の思いを生き生きと表現する中で自分の作品に満足し、自己肯定感を高めることができた。しかしながら、児童一人一人が自ら課題を解決しようとする主体性十分に育っていない。昨年度の学校評価に関する児童アンケート結果からも、学習場面において、進んで発言しようとしている児童は全体の70%であった。したがって、児童一人一人が確かな考えをもち、互いに伝え合う中で主体的に学びあおうとする学習集団として高めていくことが必要である。

そこで、生活科・総合的な学習の時間を中心としたキャリア教育の研究に取り組むことにより、子どもたちが自ら意欲をもち、計画を立て、価値のある本物の体験活動を行う中で、確かな考えをもち、主体的に表現し、意欲的に学び合う学習集団へと高めていきたい。そこで、今年度は「地域の『ひと』『もの』『こと』に主体的にかかわる児童の育成」と研究テーマを設定した。

(2) 研究組織・体制



(3) 研究内容

- 地域の特性を活かしたキャリア教育学習プログラムの開発と実践
 - ・ 地域の特色とよさに着目した教材開発
- 学ぶ意欲が高まる指導・支援の在り方
 - ・ 地域の人材活用 ・ 学習の手引きの活用
 - ・ コンセプトマップ法とKJ法の活用
- 評価の方法および改善
 - ・ ポートフォリオ評価の導入

2 授業改善の視点

- ① 教材の工夫：地域の「ひと・もの・こと」を学ぶことで、地域の文化にふれ、「生活科・総合的な学習の時間が楽しみ」という児童を90%以上にする。
- ② 指導方法の工夫：ゲストティーチャー・学習の手引き・単元構造図の活用等を図ることにより、児童が幅広く、より多くのことを効果的に学び、主体的に課題解決に向けて取り組む児童を90%以上にする。
- ③ 評価の工夫：一人一人が自信をもって自己表現できる場を設定し、子どものよさや可能性に着眼した評価の在り方を工夫することによって、自分の学びを振り返り、育ちを自覚できる児童を90%以上にする。

3 研究の成果と課題等

(1) 成果

- 児童にとって身近な地域の「ひと・もの・こと」にかかわる学習材を中心とした単元学習に取り組みせることにより、児童が今まで知らなかったことについて自ら課題をもち、積極的に調べる姿が見られるようになった。また、価値のある体験活動を単元の中に設定することにより、児童は五感を通して地域の文化にふれ、楽しみながら活動することができた。

【アンケート結果】

「生活科・総合的な学習の時間楽しみ」→94.5%

「地域のことを好んで学ぶ」→9.5%増加（事前事後の比較）

- 児童が自力解決できない課題について、地域の専門家（ゲストティーチャー）に学ぶ機会を単元の中で設定することにより、児童は意欲的に課題解決する姿が見られるようになった。また、児童が地域の「ひと」にふれるなかで、仕事に対する思いや考え、夢や生き方について知るなど貴重なことを学ぶことができた。さらに学習の手引きの活用を工夫することにより、児童に学び方を学びながら進んで学習に取り組む姿勢が身についてきた。

【アンケート結果】

「自分の考えを深めるために人の意見や考えを聞きたい」→90%

「わからないとき、進んで問ったり質問したりする」→8.5%増加（事前事後の比較）

- 児童一人一人の学びの中で、一対一の対話を重視した評価を行うことにより、個々の課題や解決への見通しについて確認・調整することで、意欲的に学ぶ姿勢が見られるようになってきた。また、単元の終末において児童がポートフォリオを整理し、学んだことを表現する場を設定することにより、自己の学びの成果について自らの育ちを自覚することができた。さらに児童は学習課題の解決を図るなかで充実感や達成感を味わうことができている。

【アンケート結果】

「生活科・総合的な学習の時間にかかった、できたという気持ちになる」→91%

「わかるまで粘り強く取り組む」→6.5%増加（事前事後の比較）

(2) 課題

- 西城小オリジナルプラン（カリキュラム）のさらなる修正と開発に取り組んでいく必要がある。
- 地域の価値のある学習材を効果的に活用しながら、児童一人一人に付けさせたい力をどのように育てていくかということについて、単元の構想力や実践に応じた学習の手引きを作成する等、教師の力量をさらに高めるための研修を積む必要がある。
- 価値のある体験活動から児童自身が「問い」を發し、積極的に課題解決に取り組む姿勢を育てるよう指導する。

(3) 今後の改善方策等

- 学校・家庭・地域がこれまで以上に一体となり、共通理解を図りながら児童の学びの環境づくりに励んでいく。
- 「測る評価」から「育てる評価」への転換を図り、対話を重視した個へのかかわりを大切にした評価活動を行っている。（作品ポートフォリオ評価・凝集ポートフォリオ評価への取り組み）
- 価値のある多様な体験活動や学習材に出合わせていく中で、児童が「ぜひ調べたい」「解決したい」という「問い」を生むことができる学びへと高めていく。さらに、子どもに付けたい力を内容知・方法知・自分知で整理し、体系的な学習プログラムづくりに取り組んでいく。

4 実践事例

(1) 第3学年 総合的な学習の時間

(2) ①単元名

「大すき！西城～町のじまんを見つけよう～」
～発信！西城町名物「ひばごん井」編～

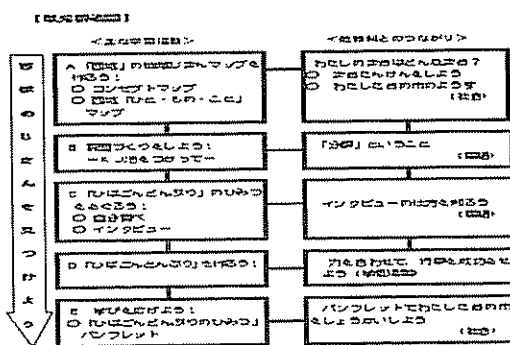
②単元の目標【キャリア教育との関連】

- 自分たちが見つけた西城町の食文化（ひばごん井）について、課題をもって学習しようとする意欲を高める。【意志決定能力】
- 調べ学習やインタビュー活動を通して得られた情報を適切にまとめる。【情報活用能力】
- 西城町の食文化（ひばごん井）のすばらしさを自分たちの地域のじまんとして、伝え方を工夫し、発信する。【人間関係形成能力】
- 名人の生き方に学び、自己のくらしをよりよくしていこうとする態度や地域への愛着を深める。

③ 研究主題との関連

地域の「ひば」「もの」を「こぼ」に国際的に発信する地域活性化の取り組みから学ぶ国際化の取り組みと学習を通して～		
I 地域の特色を盛り込んだキャリア教育学習プログラムの開発と実践	II 学習環境が育む地域力の工夫	III 評価の工夫
○ 地域の「もの」として、子どもたちが興味を持っている「ひばごん井」を取り上げることで、地域活性化の取り組みについて発信し、地域への愛着をのびせらせる。	○ 地域で育む国際化の取り組みとして、ゲストティーチャーとして外国人児童、ひばごん井の作り手である主婦や仕事に就く思いや生き方について国際的に発信させる。	○ コンセプトマップ・ポートフォリオ・自己評価カードなどを用いて、児童一人一人の学びの成果を評価していく。

④単元の展開

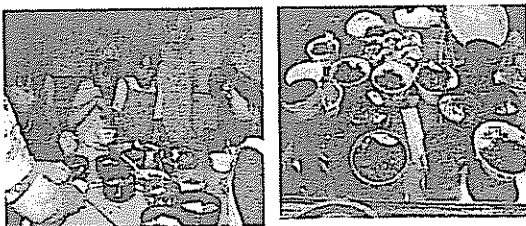


(3) 授業改善のポイント

① 教材の工夫

地域の特色とよさに着目した教材開発

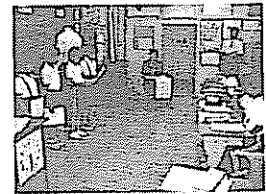
本単元では、児童にとって身近な「ひばごん井」を学習教材として用いたことにより、今まで知らなかった「食材」や「名前の由来」「作り方」など、関心をもって調べ学習を行うことができた。学習を進めていく中で自分たちの住む地域のことを積極的に知ろうとする姿勢が育ってきている。また体験活動として、実際に「ひばごん井」を作る活動を通して、児童は地域の食文化にふれていくことができた。「最高においしい。この味おつまでも忘れない」と感想をもち、学習を進めていく中で児童は「ひばごん井」を西城地域のじまんの一つとしてとらえるようになった。



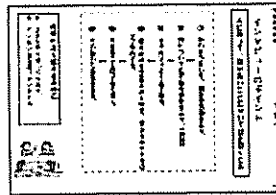
② 指導方法の工夫

地域の人材活用

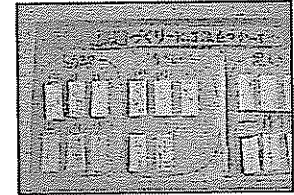
調べ学習の中で、インターネットやパンフレットの資料から



では解決できない課題について、地域で実際に「ひばごん井」を作っておられる方をゲストティーチャーとして学級に招き、インタビュー活動を行う中で、児童はゲストティーチャーの仕事に対する思いや考え、夢や生き方について知るなど資料からでは分からない貴重なことを学ぶことができた。



【学習の手引き】

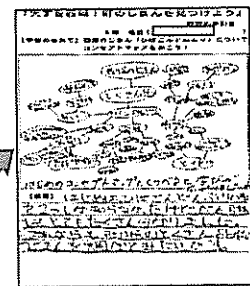
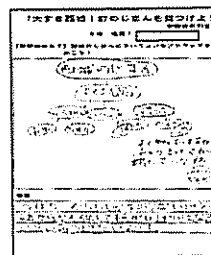
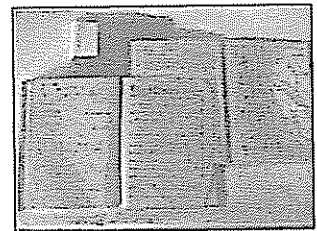


【課題作り～KJ法の活用～】

③ 評価の工夫

ポートフォリオ評価

児童一人一人の学びの中で、対話を重視した評価を行うことにより、個々の課題や解決への見通しについて確認することで、児童が意欲的に学ぶ姿勢が見られるようになってきた。単元の終末において児童はポートフォリオを整理し、パンフレットや作文等で「ひばごん井のひみつ」を表現し、お互いの学びの成果を交流し評価し合った。



【コンセプトマップ法による単元導入時と単元終了時とを比較し、自己の学びの深まりを自覚させる】

(4) 成果と課題

3年生は「総合的な学習の時間」をスタートする学年であることを考え、学習の手引きを活用させながら丁寧な学び方の指導を行った。その結果、児童は一つ一つの学びをふりかえりながら意欲的に課題解決に向けて取り組む姿勢が身に付いてきた。また、地域の方をゲストティーチャーとして招くことにより、児童の調べ学習の過程で適切なアドバイスをいただくことができ、地域の学習を深めることができた。さらに課外において、自主的に課題解決のために取り組む児童の主体性が育ってきた。今後はポートフォリオ評価において児童との対話を大切に作品化・凝集化を図り、さらなる充実を図っていく。